SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Tourism based Development of Ifugao in North Luzon, Philippines : A Preliminary Study on the Socio-economic Development of “Peripheral area”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川崎, 和也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027538

フィリピン、北部ルソン島イフガオ州の観光開発
－「周辺世界」の社会経済発展に関する予備的研究－

川崎 和也（静岡大学地域創造教育センター）

はじめに

観光産業はいまや世界資本主義を牽引する重要な分野のひとつである。世界観光機関によると、2017年の国際観光者数は 13 億 2600 万人を記録し、8 年連続で持続的な成長を遂げている（世界観光機関 2018: 4)。観光収入も 1 兆 3400 億米ドルにのぼり、観光産業は化学分野、エネルギー分野に次いで世界第 3 位の輸出分野である（世界観光機関 2018: 6)。世界観光機関は、観光産業は今度もさらなる成長を遂げることを予見している。

このような情勢を背景にして、現在、世界のさまざまな国や地域で観光開発が進められ、その動きはいわゆる「周辺世界」と呼ばれる地域にも広がっている。そしてそれは、フィリピンの北部ルソン島のイフガオ州でも例外ではない。イフガオ州は、フィリピンでは地理的にも、歴史的にも、そして社会経済的にも「周辺世界」に位置付けられてきた。もちろん、イフガオ州ではこれまで観光開発が行われてこなかったわけではないが（四本 2009a)、昨今の世界規模の観光の拡大を受けて、現在、行政機関のリーダシップのもとで観光開発が進められようとしている。

本稿は、イフガオ州の観光開発を事例にして、世界資本主義経済が進展する状況下における「周辺世界」の社会経済発展を理解するための予備的研究である。2017 年以来、実施している現地調査[1)]にもとづいてイフガオ州の観光の現状を報告するとともに、2015 年に策定された『イフガオ州観光開発計画』（PGI & DTCAR 2015）の分析を通じて、イフガオ州における観光開発を通じた社会経済発展の展望と課題を明らかにしたい。

1.「周辺世界」としてのイフガオ

イフガオ州は、北部ルソン島のコルディリエラ特別行政区を構成する 6 つの州[2)]のひとつで、首都のマニラから直線距離でおよそ 360 キロメートルのところに位置する。コルディリエラ山岳地域に位置するイフガオ州の標高は 500～1500 メートルで、周囲を険しい山々に囲まれている。

2015 年のイフガオ州の人口は 20 万 2802 人で、コルディリエラ特別行政区の総人口の約 12%、フィリピンの総人口の約 0.2%にあたる。イフガオ州は 11 の郡（municipality）[3)]で構成

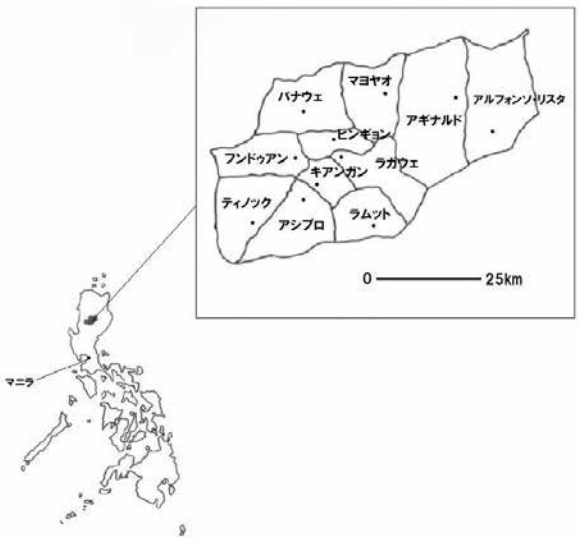


図 1　イフガオ州の位置

され、さらにその下位の行政単位として州内に 175 の区・町・村（barangay）がある。州都はラガウェである。

イフガオ州の主要な民族集団は「イフガオ」と呼ばれる先住民族の人々で、イフガオ州の人口の約 7 割を占める。イフガオとは、北部ルソン島のコルディリエラ山岳地域に住む民族および言語を指し示す言葉である（清水 2013: 189）。スペイン統治時代には、コルディリエラ山岳地域に暮らす他の民族集団とともに「イゴロット」と総称された（清水 2013: 22）。イフガオ族はさらにアヤンガン（Ayangan）、トゥワリ（*Tuwali*）、カラングヤ（*Kalanguya*）、カリンガ（*Kalinga*）の 4 つのサブグループに分類される（四本 2009a: 64）。イフガオ族は双系制で、階層的な社会構造を持つとされる。男女を問わず、長子が財産を相続することも、イフガオ族の慣習の特徴のひとつである[4]（合田 1994; 1997, 菊池 1974）。

イフガオ族の人々は、険しい山間に水田を切り開き、稲作栽培を生業とする生活を 2000 年以上にもわたって営んできた。これらの水田は「天国へと続く階段」とも形容され、「世界八大不思議」のひとつにも数えられている。1973 年、「大統領令 260 号」によって、イフガオ州の棚田群はフィリピンの文化遺産に指定された（水本 2013: 50）。2015 年には 2000 年以上にもわたって稲作栽培の伝統技術を保持する「生きている文化的景観（living cultural landscape）」として、歴史的にも文化的にも高い価値を有することが評価されて、バナウェ、フンドゥアン、マヨヤオ、そしてキアンガンにある 5 つの棚田群がユネスコの世界文化遺産に指定されたのだった。

1.1. イフガオ州の社会経済的状況

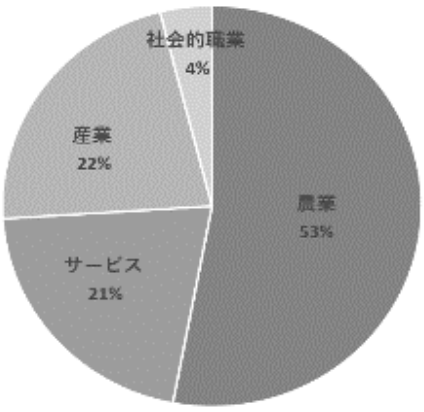
イフガオ州は 2000 年まで全国にある 81 州の中で 4 番目に貧しい地域とされ、住民の 55.7%が貧困層に分類されていた。2006 年にはイフガオ州の貧困層は 33.9%にまで減少するが、フィリピンの全国平均が 26.9%であるのを考えると、依然として高いと言わざるを得ない（四本 2012: 122）。「人間開発指数（Human Development Index: HDI）」[5]も低い数値を表している。表 1 に示すように、イフガオ州の人間開発指数は 0.483 で、フィリピンの全国平均を大きく下回っている。

表 1　人間開発指数

	HDI	出生時平均余命（2008年）	平均就学年（2008年）	就学予測年数（2008年）	1人当たりの国民所得（2009年）
マニラ	0.837	72.8	10.7	12.9	73,738
アブラ州	0.508	69	8.7	12.3	33,236
アパヤオ州	0.529	63.5	7.4	12.7	38,603
ベンケット州	0.883	74.8	10	14	80,431
イフガオ州	0.483	61.7	6.4	12.1	36,109
カリンガ州	0.562	62.6	7.1	12.9	43,656
マウンテン州	0.449	63.7	7.5	13.2	30,245
フィリピン 平均	0.633	72	8.7	12	46,136

出典：水本（2013:51）

図 2 は、イフガオ州の就業構成を表したものである。就業労働者の 53%が農業、漁業、家畜業に従事する。イフガオ州では換金作物としてバナナやトウモロコシ、コーヒー豆などが栽培されるが、いまでも稲作の栽培も盛んである。イフガオ州で伝統的に栽培されるのはティナウォン（*Tinawon*）と呼ばれる在来種のコメであるが、近年は品種改良されたコメも導入され、二期作が行われる。しかし、その地形的な



出典：PGI & DTCAR（2015: 4）

図 2　イフガオ州の就業構成（2013 年）

特性によって、機械化はおろか、水牛による耕作にも適しておらず、そのほとんどがいまだ手作業で行われており、地域住民たちにかなりの重労働を強いている。またコメの生産性も高くはない。近年は現金経済が浸透し、現金に対する需要はこれまで以上に高まっており、水田を畑地や養殖池に転用する動きが顕著である。

先述したように、イフガオ社会には長子相続の慣習があり、いまでもその影響は残っている。長子が土地を相続すると、第二子以降には相続できる土地はない。新たに土地を開墾するにしても、特異な地形であるために、耕作に適した土地には限りがあることから、彼らは、農業以外の仕事に従事せざるを得ない。しかし、イフガオ州には雇用の機会それ自体が少ないので、地域住民たちの多くがマニラやバギオなどの都市部や海外に出稼ぎに出るのが一般的である。

1.2. イフガオ州の歴史

16 世紀から始まるスペインによるフィリピン統治時代を通じて、その影響力がイフガオ州を含むコルディリエラ山岳地域にまで浸透することはなかった。16 世紀以降、スペインは、コルディリエラ山岳地域で産出される金を求めて、さらにはタバコの専売事業を脅かす脅威を排除するために遠征部隊を派遣し[6)]、イフガオ族の平定と統治を試みたが、その作戦はたびたび失敗した。スペインによるコルディリエラ山岳地域への遠征が再開されるのは 19 世紀のことで、スペインは、コルディリエラ山岳地域を平定するための軍事作戦を積極的に展開した。1850 年代にはキアンガンに軍の駐屯地を建設し、そこを拠点にして、イフガオ族を平定するための遠征部隊を派遣した（清水 2013: 226-229）。しかし、スペインは 1898 年の米西戦争に敗北し、結局、コルディリエラ山岳地域を統治下に治めることはできなかったのである。

米西戦争の勝利とその後のパリ条約によって、フィリピンを割譲されたアメリカは、今度はフィリピン革命政府軍との間で激しい戦闘を繰り広げて、主要都市とその周辺地域を制圧した。一方、北部ルソン島に対しては、積極的な懐柔政策を行うことで、これらの地域を徐々に支配下に治めていった。イフガオ族の人々は、アメリカの役人との間で、比較的良好な人間関係を築きあげたという（清水 2013: 220-221）。

さて、第 2 次世界大戦において、フィリピンは日本軍と連合国軍との間で激しい戦闘が繰り広げられた地域のひとつである。なかでも、イフガオ州を含むコルディリエラ山岳地域は、大戦末期、マニラから逃げ延びた日本軍が連合国軍との間でゲリラ戦を繰り広げるなど、激戦の舞台となった。イフガオ州のキアンガンは、この時、日本軍を率いた第 14 方面軍事司令官の山下奉文大将が降伏した地である。捕虜としてバギオに送還されるまでの間、山下大将が一時期身柄を確保されたキアンガン小学校の建物は、現在、平和資料館となっており、当時の様子を伝える数々の資料が展示されている。

写真 1　キアンガン平和資料館

戦後、フィリピンは、再びアメリカの統治下に置かれたが、1946 年 7 月 4 日、再独立を果たし、フィリピン共和国（第三共和政）が誕生した。しかし、首都のマニラから地理的に遠く離れたところに位置し、さらに地形的

表 2　フィリピンを訪れた外国人観光者数の推移（2001-2015 年）

2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
180	193	191	229	262	284	309	314	302	352	392	427	468	483	536

（単位：万人）

出典：https://www.jtb.or.jp/column-photo/column-workshop-philippines-kanno/

な要因も影響して、イフガオ州は、中央政府の強い影響下にあったわけではなかった。それを象徴するのが、フィリピン共産党・新人民軍によるイフガオ州の実効支配である。1970 年代、イフガオ州、とくにフンドゥアンは、フィリピンの中央政府から逃れてきた反政府勢力であるフィリピン共産党・新人民軍のゲリラ活動の拠点となった。新人民軍とフィリピン国軍との間では、20 年以上にもわたって激しい武力衝突が繰り広げられ、1990 年にはフンドゥアンの副市長が新人民軍によって殺害される事件も起こっている（清水 2013: 210）。

2. フィリピンの観光政策－2000 年代を中心として－

さて、イフガオ州の観光の現状をみる前に、フィリピンの観光政策について、とくに 2000 年代以降の動きを中心にみてゆこう。表 2 に示すように、フィリピンを訪れる外国人観光者は、2001 年のアメリカ同時多発テロ事件の影響もあって、一時期 200 万人を下回ったが、2004 年以降は徐々に回復し、2007 年には初めて 300 万人を超えた。その後も外国人観光者は増え続け、2015 年には 536 万人がフィリピンを訪れた。観光産業はフィリピンの国内総生産の約 1 割を占めるなど、いまやフィリピンの国家経済を支える主要産業である。

フィリピンの観光産業の成長の背景には、世界規模で拡大する観光市場に対して、2000 年代以降、フィリピンの中央政府が積極的な対策を推し進めてきたことがある。フィリピン国内に対しては、例えば、「祭日経済（Holiday Economics）」を創設している。これは、国の祭日を調整することで、フィリピン国民が国内の観光地を訪れるための長期休暇を確保できるようにする制度である（四本 2009b: 119）。その経済的効果は絶大で、祭日経済の導入以前の同じ週と比較すると、全国のホテルの稼働率は約 20%上昇し、バス会社は平均 40%以上の利益をあげるなど、3 億 6770 万フィリピン・ペソ [7]の観光利益を生んだという（四本 2009b: 119）。

2000 年代以降、フィリピンの中央政府がとくに力を注いだのが外国人観光者の誘致であった（菅野 2017: 56）。まず、ひとつは海外投資の呼び込みである。フィリピンの中央政府は観光省に投資振興局を新たに設置した。さらに海外企業による観光分野への投資に対して税制を緩和したり、投資家のための特別在住ビザや外国籍を雇用するための権利を認める制度を創設したりした（四本 2009b: 120-121）。また観光省は国内の観光地の開発にも取り組んだ。なかでも「ワオ・フィリピン（WOW Philippines）」は、その中核を担うものであった。これは、全国から魅力ある観光地をいくつか選び出して紹介するものである。このキャンペーンを通じて、ボロカイ島やパラワン島、北部ルソン島にある歴史都市ビガン、そしてイフガオ州の棚田群などが、フィリピンを代表する観光地として世界に向けて発信されたのだった（四本 2009b: 120）。さらに観光省は 2015 年を「フィリピン観光年」に定めて、外国人観光者のさらなる誘致を目指して、さまざまなキャンペーンを繰り広げた。とりわけ、日本や中国、韓国をターゲッ

表 3　イフガオ州を訪れた観光者数の推移（2004-2013 年）

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
国内	57287	53971	59432	52112	55381	52855	48537	45790	37754	63813
海外	27758	36974	33605	50213	56014	48442	52127	39265	25460	48046
合計	85045	90945	93037	102325	111395	101297	100664	85055	63214	111859

（単位：人）

出典：PGI & DTCAR（2015: 25）

トにして積極的なプロモーション活動を展開し、さらに旅行パッケージの充実化、フィリピンと世界の各都市を結ぶ国際路線の拡充をはかった。フィリピンの中央政府は 2020 年までにフィリピンを訪れる外国人観光者を年間 1000 万人とすることを目標に掲げている（菅野 2017: 57）。

3. イフガオ州の観光

3. 1. イフガオ州の観光の概要

イフガオ州の観光の様子をみるにあたって、まず統計資料などをもとにして、その概要を整理しよう。表 3 は、2004 年～2013 年にイフガオ州を訪れた観光者を国内・海外別に表したものである。2004 年以降、イフガオ州を訪れる観光者の数は前年比を上回るペースで毎年増え続け、2008 年には 11 万 1395 人の観光者がイフガオ州を訪れた。しかし、2009 年以降になると、一転して観光者は減少し、とくに 2011 年以降は外国人観光者数の落ち込みが目覚ましい。そして 2012 年にはイフガオ州を訪れた観光者は 2004 年以降最低となる 6 万 3214 人まで減少した。これは、フィリピンを訪れる外国人観光者が 2010 年以降増加しているのとは対照的である（表 2 参照）。2013 年、イフガオ州を訪れる観光者の数は驚異的な回復をみせ、過去 10 年間で最高となる 11 万 1859 人が訪れている。

一方で、フィリピン全体でみてみると、イフガオ州を訪れる観光者は多くはない。2004 年以降、過去 10 年間で最も多くの外国人観光者がイフガオ州を訪れたのは 2008 年の 5 万 6014 人であった。しかし、その割合は、同年にフィリピンを訪れた外国人観光者の 1 割にも満たないのである。

ところで、イフガオ州を訪れる外国人観光者は、どこの国や地域からやって来るのだろうか。それを示したのが表 4 である。2006 年、イフガオ州を訪れた外国人観光者で最も多かったのがイスラエルからの観光者で、約 2500 人であった。次に多かったのがオランダ（約 1750 人）で、ドイツ（約 1700 人）、アメリカ（約 1450 人）、フランス（約 1050 人）の順である。一方、2013 年に最も多かったのがフランスからの観光者で、2006 年の約 4 倍の 4345 人がイフガオ州を訪れていた。イスラエルからの観光者は 1052 人で、2006 年の半分以下である。2006 年に 2 番目に多かったオランダか

表 4　イフガオ州の外国人観光者（上位 10 カ国）

2006年		2013年	
イスラエル	2500	フランス	4345
オランダ	1750	ドイツ	2270
ドイツ	1700	アメリカ	2093
アメリカ	1450	イギリス	1100
フランス	1050	イスラエル	1052
イギリス	750	カナダ	984
韓国	700	日本	878
日本	680	スイス	856
オーストラリア	550	オーストリア	748
カナダ	480	デンマーク	699

（単位：人）

出典：UNESCO Bangkok（2008: 32）、PGI & DTCAR（2015: 26）

らの観光者は、2013 年の統計では上 10 ヶ国にも入っていない。2013 年の統計ではオランダ、韓国、オーストラリアに代わって、スイス、オーストリア、デンマークからの観光者が上位 10 ヶ国を占めている。

表 5 は、2013 年にイフガオ州を訪れた観光者を郡別に示したものである。この表からも分かるように、国内、外国ともにバナウェを訪れる観光者が圧倒的に多い。とくに外国人に関しては、約 85%の観光者がバナウェを訪れた。ここには、ユネスコの世界文化遺産に指定された 5 つの棚田群のうちの 2 つの棚田群がある。その次に観光者が多く訪れたのがフンドゥアンで、ここにも世界文化遺産に指定された棚田群のひとつがある。一方、キアンガン、マヨヤオにも世界文化遺産に指定された棚田群があるが、ここを訪れる観光者は多くない。交通アクセスの利便性の問題などがその要因であると考えられる。

表 5　イフガオ州の観光者の訪問先（2013 年）

郡	国内観光者	外国人観光者	合計
アギナルド	266	10	276
アルフォンソ・リスタ	11111	0	11111
アシプロ	859	14	873
バナウェ	29291	41160	70451
ヒンギョン	—	—	—
フンドゥアン	7299	5707	13006
キアンガン	4683	769	5452
ラガウェ	6245	29	6274
ラムット	1574	0	1574
マヨヤオ	746	346	1092
ティノック	1739	11	1750
合計	63813	48046	111859

（単位：人）

出典：PGI & DTCAR（2015: 26）

次節では、イフガオ州における観光の様子について、もう少し具体的にみてゆくことにしよう。

3.2. フンドゥアンの観光

フンドゥアンはイフガオ州の北西部に位置する、人口約 9400 人の郡である。フンドゥアンにおける最大の観光資源はいうまでもなく棚田で、ハパオ村に広がる棚田群はユネスコの世界文化遺産に指定される「コルディリエラの棚田群」を構成する 5 つの棚田群のひとつである。村の幹線道路沿いには、観光者たちがその眺望を眺めたり、写真を撮影するための展望台が整備されている。イフガオ州政府は、そのほかにも、ハパオ川沿いにある「ボギャ温泉 (Bogyah Hot Spring)」や「原住民村 (Native Village)」も、フンドゥアンにおける重要な観光資源に位置付けている (PGI & DTCAR 2015: 10)。毎年 7 月～8 月にかけて開催される収穫祭・感謝祭「プンヌク・フェスティバル」も国内外から多くの観光者たちが訪れるという。

観光者の受け入れにあたっては宿泊施設がまず重要となる。フンドゥアンには 5 軒の宿泊施設がある。部屋の総数は 29 室で、宿泊受け入れ可能人数は 147 名である (PGI & DTCAR 2015: 27)。例えば、フンドゥアン滞在中、筆者が宿泊していた宿泊施設の部屋数は 8 室で、各部屋はツインの仕様となっており、トイレ、シャワーを完備する。2013 年のフンドゥアンにおける宿泊施設の年間稼働率は 45%で、11 ある郡の中では最も高い数字である (PGI & DTCAR 2015: 27)。他の郡と比較した際のここを訪れる観光者数に対しての宿泊施設・部屋数の少なさが、逆に高い稼働率を導いていると考えられる。しかし、フンドゥアンを訪れる観光者の多くは、ここには宿泊しない。隣接す

写真 2　ハパオ村の棚田

るバナウェを起点とし、午前中に出発して、ここを訪れ、午後には再びバナウェに戻るのが、フンドゥアン観光の基本的なルートである。

フンドゥアンを観光で訪れる場合、観光者たちは個人で自由に観光することはできず、現地の観光ガイドを同伴させる決まりがある。2017 年 2 月時点でフンドゥアン観光協会には 24 名が観光ガイドとして登録している。ガイド料は観光ガイド 1 人につき、約 6 時間のガイドで約 500 フィリピン・ペソである。ハパオ村の棚田群をはじめとして、フンドゥアンにある棚田群のいくつかをめぐり、ボギャ温泉を訪れるのが基本的な観光ルートだという。写真 3 の男性はフンドゥアン観光協会に登録する観光ガイドの 1 人である。2017 年 2 月当時 33 歳で、2012 年から観光ガイドの仕事を始めた。それ以前は建設業に従事していたという。いまでは観光ガイドの仕事を専任とする。毎日ガイドの仕事があるわけではないが、ガイド料がすべて自分の収入になるので、前職と比べると、その金額は非常に大きいという。

写真 3　フンドゥアンの観光ガイド

写真 4　イカットの布を織るアリス

観光においては、土産物もまた重要な資源である。イフガオ州の主要な観光土産としては、木彫り彫刻、イカット織りの布とその加工品、そして網カゴなどがあげられる。2017 年、2018 年の現地調査では、フンドゥアンの主要なエリアを訪れたが、その時に確認できた観光者向けの土産物を販売する店は 2 軒だけであった。そのひとつは郡役場に隣接する土産物店である。店内に入ると、イカット織りの布やそれを加工した商品、木彫り彫刻などがあり、それらは無造作に陳列されていた。次節で紹介するバナウェの土産物店と比較すると、それはあまりにも閑散とした光景であった。

こうした観光土産は、どのような人々によって、どのようにつくられているのだろうか。“Mataha’s Weaving”は、フンドゥアンにあるイカット織りの布を製作する工房である。この工房の主はアリスという女性である（写真 4）。彼女の父母ともに農家の出身で、織物を家業にしてきた家系ではない。イフガオ州政府が主催する雇用訓練プログラムに参加したのが、彼女が織物を始めるきっかけだったという。そこで織物の技術を習得し、その後、自らの工房を持つようになった。この工房は家族経営の工房で、アリスが布を織り、彼女の娘がそれをカバンなどに加工する。アリスの義理の妹（弟の妻）も、数年前から彼女の指導を受けながら、ここで織りを始めたという。完成した布やそれを加工した商品は、フンドゥアンではなく、バナウェにあるイフガオ州政府のディスプレイセンターなどに卸し、販売する。値段は自分で自由に設定することができる。エリスによると、1 メートルの布を織るのにかかる経費はおよそ 60 フィリピン・ペソで、それを販売する際には、人件費などを加味して、原価の 2 倍くらいの値段をつけて販売する。アリスに限らず、フンドゥアンでイカット織りを生産する人々の多くは、バナウェにある土産物店に商品を卸して販売するという。それは織物に限ったことではなく、木彫り彫刻や網カ

ゴも同様である。

以上のことを踏まえて、フンドゥアンにおける観光の現状を要約すると、ここは、バナウェを訪れる観光者が少し足を伸ばして訪れる観光地で、その多くはフンドゥアンには宿泊しない。フンドゥアンは、観光者たちがただ通り過ぎるだけの観光地であると言えるだろう。またここは、木彫り彫刻やイカット織りの布などの観光土産の生産の場であって、その消費の地はバナウェである。フンドゥアンの観光においては、バナウェがその中核を担っている。それでは、バナウェの観光の様子はどのようなものなのだろうか。

写真 5　バナウェの棚田

写真 6　民族衣装を身にまとう女性たち

写真 7　バナウェの土産物店

3.3. バナウェの観光

イフガオ州の北西部に位置する人口約 2 万 1000 人のバナウェには、ユネスコの世界文化遺産に指定される棚田群の 2 つがある。2013 年にバナウェを訪れた観光者は 7 万 451 人で、イフガオ州全体の観光者のおよそ 6 割にあたるなど、イフガオ州における観光の中心となる場所である。

バナウェは、イフガオ州の中ではフィリピンの中央政府が最も力を注いで観光開発を進めてきたエリアである。フィリピンの中央政府は 1969 年に国営バナウェホテルの建設に着手し、1973 年にそれは開業した。その後もバナウェの地元住民や近隣の町の住民らによって、ハーウィロッジ（1981 年）、ラスベガスロッジ（1983 年）、バナウェビューイン（1985 年）、グリーンロッジ（1989 年）などの宿泊施設が開業している（四本 2009a: 67-68）。イフガオ州にある宿泊施設のおよそ 4 割にあたる 34 軒がバナウェにある（PGI & DICAR 2015: 27）。

バナウェの中心部に来ると、多くの観光者たちの姿をみることができる。観光案内所もあり、彼らはここでイフガオ州の観光に関する情報を収集する。フンドゥアンのハパオ村と同様に、棚田を最も綺麗にみることのできるスポットには展望台が整備されている。ここには、イフガオ族の伝統衣装を身にまとった高齢の女性たちがいる。彼女たちは、観光者たちの写真の被写体になることで、彼らから現金収入を得ている（野間 2008: 129）。

バナウェには、観光者向けの土産物店も多くあり、とくに多くの観光者たちが訪れる展望台付近には、多くの土産物店が軒を連ねている。ここでは、木彫り彫刻、イカット織りの布やその加工品、網カゴのほかにも、T シャツ、キーホルダー、アクセサリ、絵葉書などが販売されている。値段は、例えば、2017 年 3 月時点で、イカット織りの布を加工してつくった小さなカバンは、100 フィリピン・ペソの値段で

販売されていた。フンドゥアンの原住民村にある土産物店では、同様の商品が 50 フィリピン・ペソで販売されており、値段は 2 倍である。土産物店の向かいには、木彫り彫刻の工房もいくつかあり、観光者たちはその製作の様子を自由に見学できる。人目のつかないところで木彫り彫刻が製作されていたフンドゥアンとはきわめて対照的である。

4. イフガオ州の観光開発

前章でも少し触れたが、イフガオ州では、これまで観光開発が進められてこなかったわけではなく、1970 年代にはすでに国家主導による観光開発が進められていた。国営バナウェホテルの開業や棚田のフィリピンの文化遺産の指定化は、そのことを如実に物語る出来事である。1970 年代のイフガオ州における観光開発の背景には、当時のマルコス政権が推し進める公共事業を中心とした地域開発政策の影響に加えて（四本 2009a: 67）、観光地化を通じて「周辺世界」であるイフガオ州に対する中央政府の影響力を浸透させる意図もあった。またイフガオ州政府も 1990 年に観光局を設置し、州レベルで観光振興に取り組み始めた。当初は知事室に部署が設けられ、担当職員もわずか 1 名だけであったが、現在は独自のオフィスを持ち、複数の職員で運営しているという（四本 2009a: 68）。

イフガオ州政府は、1990 年代以降、観光産業をイフガオ州の社会経済発展の原動力に位置付けてきた。だが、その実情はというと、必ずしも期待した成果をあげられていないという（PGI & DICAR 2015: 32）。しかしだからと言って、観光産業以外の分野にイフガオ州の社会経済発展の可能性を見出そうとしても、イフガオ州は資源に乏しく、また大都市経済圏からも地理的に遠いところに位置するので、現時点では観光産業に頼らざるを得ない状況にある。さらに第 2 章でもみてきたように、フィリピンの中央政府は、2000 年代以降、国家的プロジェクトとして観光振興に取り組んでおり、その点からしても、イフガオ州の観光振興は不可避なのである。

4.1. イフガオ州の観光が抱える諸問題

イフガオ州政府は、観光を通じたイフガオ州の社会経済発展の弊害となっている要因として、以下の 5 つの点をあげている（PGI & DICAR 2015: 32）。

① イフガオ州の各地にある観光資源や観光施設の価値や魅力が減少している。その原因として、以下の点が指摘されている。
- 観光資源および観光施設の管理が行き届いておらず、さらに環境破壊や伝統的な文化実践の喪失によって、イフガオ州の観光資源や観光施設を取り巻く物理的環境が悪化している[8)]。
- 電気、水道をはじめとする公共インフラが整備されていない[9)]。
- イフガオ州内を移動するための交通アクセスが不十分である。

② イフガオ州を訪れる観光者の多くが、満足のいく観光経験を享受できていない。その原因として、以下の点を認識している。
- ほとんどの宿泊施設や飲食店などで、観光者に対して高い品質のサービスを提供できていない。
- 無許可の観光ガイドが横行している。
- 観光ガイドがイフガオ州内にある観光資源や観光施設、さらにはイフガオ族の歴史や文化についての十分な知識を持ち合わせていない。

③　イフガオ州の各地にある観光資源や観光施設が有する潜在力を生かし切れておらず、その結果、観光資源としての棚田に依存する状況を生んでいる。

④　観光者への情報発信が不十分で、観光者がわざわざ足を運んでまで訪れたいと思える観光地になっていない。

⑤　観光によって得られた利益が特定のステイクホルダーに集中し、イフガオの地域社会に平等に分配されず、地域住民たちの生活向上には結びついていない。

4.2.イフガオ州の観光開発計画 2015-2020

2015 年、イフガオ州政府は、観光を通じてイフガオ州の社会経済を発展させてゆくために、コルディリエラ特別行政区観光局とともに『イフガオ州観光開発計画 2015-2020』(PGI & DICAR 2015) を策定した。この観光開発計画では、「持続可能な観光」、すなわちイフガオ州の自然環境の保護とイフガオ族の伝統的文化実践の保存・維持・継承とを両立させながら、2020 年までにイフガオ州を訪れる観光者を増やし、彼らに満足のゆく観光経験をもたらすとともに、イフガオ州の地域住民の社会経済的境遇を改善し向上させることを目標に定めている。その目標を達成するために、観光開発計画では、以下の施策に取り組むことが明記されている (PGI & DICAR 2015: 34-35)。

①　イフガオ州にある観光資源および観光施設の品質を改善し、観光者の観光経験の価値を向上させる。それを実現するために、以下の施策が掲げられている。

- 観光資源および観光施設の改修を進めるとともに、それらを長期間にわたって保護するための環境を整備する。
- 郷土料理や祭り、伝統芸能などの地域資源を観光者向けにアレンジしたり、家族的・教育的な観光パッケージなどの新たな観光商品を開発することで、イフガオ州の観光の付加価値を高める。
- イフガオ州内の交通アクセスを改善する。
- 州都のラガウェにヘリテージセンターを建設し、観光者だけでなく、地域住民もイフガオ族の歴史や文化を学ぶことのできる拠点として整備する。

②　観光者に高い品質の観光サービスを提供する。そのために、以下の施策を実施することが示唆されている。

- 観光施設、宿泊施設、飲食店などで、観光者たちに満足のいく高い品質のサービスを享受できるようにするために、従業員等の研修体制を充実させる。
- 電気、水道、情報通信などの公共インフラの整備を進める。
- 観光ガイドの訓練・研修体制を構築し、観光ガイドの質を向上させる。
- 観光者に切れ目なく観光サービスを提供するための体制を構築する。

③　イフガオ州にある魅力的な観光資源を発掘し、開発することで、イフガオ州観光の多様性を打ち出し、棚田への依存状況からの脱却をはかる。

④　都市部の旅行会社や旅行代理店などと連携し、効果的な観光プロモーションおよびマーケティングを展開する。

⑤　「持続可能な観光」を進めてゆくために、法的整備も含めた環境づくりに取り組む。

⑥　観光で得られた利益をイフガオの地域社会全体に公正に分配するために、イフガオ州の観光に関

わる組織・団体・個人の連携をはかり、統一的な体制を構築する。

5. むすびにかえて

イフガオ州は、フィリピンにおいて地理的にも、歴史的にも、また社会経済的にも「周辺」に位置してきた地域である。現在でもイフガオ州の地域住民の１人あたりの国民所得は低く、その多くが貧困層に分類され、さらに社会資本の整備も十分に行き届いているとは言い難い。一方、世界に目を向けると、観光のグローバル化が進展し、観光は世界資本主義経済を牽引する産業へと成長を遂げている。こうした情勢を背景にして、イフガオ州政府は、観光開発を通じてイフガオ州の社会経済発展の実現を目指そうとしている。

ところで、佐藤によると、観光が開発主義に組み込まれるようになるのは 1970 年代後半のことである。1979 年、世界銀行とユネスコが共同でまとめた『観光－開発へのパスポート』は、第三世界において観光がもたらす社会文化的影響について言及した、国際機関公認の初めての観光開発論とされる。以後、第三世界では観光開発を通じた社会経済発展が関心事となってゆく（佐藤幸 2003: 25-26)。しかしながら、第三世界の観光開発論に対して、佐藤が指摘するのは、その内実は通常の開発過程とはさほど大差はないということである。観光開発を通じた社会経済発展を目標に掲げながらも、そこで重点が置かれているのは、社会インフラの整備だという（佐藤幸 2003: 26)。このことは、イフガオ州の場合にも同様に指摘できるだろう。イフガオ州の観光開発計画でも、地域住民の雇用機会の創出や所得の向上に加えて、電気、水道、通信、交通インフラなどの社会生活基盤の整備に大きな比重が置かれている。イフガオ州政府は、今日の観光を取り巻く状況を背景にして、観光という現象をイフガオ州の社会資本の整備を進めてゆくための手段として、戦略的に利用しているのである。

他方で、観光開発と通常の開発との決定的な違いにも目を向ける必要があるだろう。観光は「ゲスト」、すなわち観光者の存在を前提とする現象である。観光という現象は、観光者なくして成立しえない。第三世界の観光では、多くの場合、欧米諸国を中心とする物質的にも、経済的にも豊かな国や地域の人々が訪れる。イフガオ州の観光開発計画では、こうした欧米諸国からやって来る観光者たちに高い品質の観光サービスを提供し、彼らの観光経験の満足度を高めることを重要な施策のひとつに位置付けている。しかしながら、欧米諸国からやって来る観光者たちにとって、満足のいく高い品質のサービスとはいったいどのようなものなのだろうか。

橋本による大衆観光の定義に倣うならば、観光とは「観光者にとっての異郷・非日常において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみにおいて売買すること」（橋本 1999: 2）である。しかし、観光者たちはあらゆることにおいて「異郷性」や「非日常性」を求めているのではない。彼らは、あくまでもほんの少し、一時的に異郷や非日常において楽しみを売買するのであって、異郷や非日常にありながらも、自国とは変わらない必要最低限のサービスや快適さ、安全性を求めている（橋本 1999)。このような理解に立って考えてみると、イフガオ州を訪れる観光者にとっての満足のいく高い品質の観光サービスとは、異郷や非日常に満ち溢れたものであると同時に、自国とは変わらない必要最低限のサービスや快適さ、安全性を保証したものである。彼らに満足のいく高い品質の観光サービスを提供しようとするならば、それは、イフガオの地域住民たちに観光者の価値観や規範を押し付けたり、彼らをそれらに順応させて、絡め取ってしまうことになるだろう。現在イフガオ州で推し進められる観光開発を

通じて、イフガオの地域住民たちが観光者の社会文化へと同質化されることが懸念されるのである。

一方で、この懸念に対しては、次のような批判もあるだろう。すなわち、こうした懸念は、イフガオ州の地域住民たちを観光者の社会文化の影響にさらされていない「伝統世界」に生きる存在として理想化し、彼らの社会文化や生活が変容してしまうことを拒絶する考え方にもとづいているとの批判である。紙幅の都合上、本稿では、これ以上この議論に立ち入ることはしないが、ここで忘れてはならないのは、現在イフガオ州で進められる観光開発は、イフガオ州政府をはじめとする行政機関が主導するトップダウン式の開発だということである。少なくとも、イフガオの地域住民たちはその意思決定のプロセスからは、排除されている。観光開発を通じて、いわゆる欧米諸国の物質的・経済的な豊かさを求めるのか、イフガオの土地に根差した固有の生き方を追い求めるのか、それともそのいずれでもない生き方を探求するのか、その選択はイフガオの地域住民たちの手に委ねられるべきだろう。

脚注

1) 本稿で使用する一次資料は、2017 年 2 月 25 日～3 月 4 日、2018 年 2 月 18 日～25 日、2019 年 2 月 17 日～24 日にイフガオ州で実施した現地調査によるものである。
2) コルディリエラ特別行政区は、イフガオ州のほか、アブラ州 (Abra)、アパヤオ州 (Apayao)、ベンゲット州 (Benguet)、カリンガ州 (Kalinga)、マウンテン州 (Mountain) で構成される。
3) イフガオ州を構成する 11 の郡は、アギナルド (Aguinaldo)、アルフォンソ・リスタ (Alfonso Lista)、アシプロ (Asipilo)、バナウェ (Banaue)、ヒンギョン (Hingyon)、フンドゥアン (Hungduan)、キアンガン (Kiangan)、ラガウェ (Lagawe)、ラムット (Lamut)、マヨヤオ (Mayoyao)、ティノック (Tinoc) である。
4) イフガオ族の慣習法とフィリピンの国内法との関係性については、水本 (2013) を参照のこと。
5) 「人間開発指数」とは、教育 (識字率)、保健 (平均寿命)、経済 (GDP) を組み合わせることで、社会の発展の度合いを総合的に測ろうとする指標のことである。GDP や GNP などの経済開発指標は、社会の発展状況を示すには欠点があるとの認識から、1990 年に「国連開発計画 (UNDP)」によって発明された (佐藤寛 2005: 15)。
6) 16 世紀後半、新大陸からタバコがフィリピンに持ち込まれ、栽培が始められた。タバコ栽培はカガヤン州やイロコス州で盛んになり、その専売事業はフィリピン政庁に大きな収入をもたらした。喫煙の慣習はイフガオ族などの山地民の間にも急速に広まり、彼らはタバコ栽培を積極的に行うようになった。しかし、こうした動きは、フィリピン政庁にとって、タバコの専売事業を脅かすものだった (清水 2013: 223-225)。
7) 1 フィリピン・ペソは日本円で 2.14 円 (2020 年 1 月 7 日)。
8) ユネスコの世界文化遺産に指定されたイフガオ州の棚田群の危機遺産リストへの登録はそれを象徴する出来事である。環境破壊、水田の畑地や養殖池への転用、耕作放棄地化、若者の都市部への流出、伝統的な文化実践の喪失、住宅建設などによって、イフガオ州の水田群およびその文化的景観の荒廃・破壊が進んでいるとして、2001 年にユネスコの世界遺産の危機遺産に登録された。その後、政府、イフガオ州立大学、国際協力機構 (JICA)、NGO などの活動によって、2012 年に危機遺産リストから除外されたが、その抜本的な解決には至っていない。
9) 筆者のイフガオ州での体験をもとに言えば、宿泊施設には、給湯設備はなく、水のシャワーしか浴びることができない。トイレも、その都度、自分でバケツに水を汲んで流さなければならない。たびたび停電にも見舞われ、水の供給がストップすることも珍しくはない。

参考文献

浅野壽夫

2017　「イフガオ社会における互助システムの考察」『現代社会研究』第 3 号：65-79.

合田　濤

1994　「一系家族は存在するか？－イフガオ族における洗骨習俗と養取慣行」『国際文化学研究』№.１：53-83.

1997　『イフガオ：ルソン島山地民の呪詛と変容』弘文堂.

Goda, T.

2001　*Cordillera: Diversity in Culture Change*. New Day Publishers.

Gonzalez, N. *et al.*

2011　*Ifugao Indigenous Knowledge (IK) Workbook*. Ifugao State University.

橋本和也

1999　『観光人類学の戦略－文化の売り方、売られ方』世界思想社.

菊池涼子

1974　「Cognatic 社会における族制と社会生活－フィリピン・キアンガン・イフガオ族の調査研究を通して」『民族学研究』38 巻 3・4 号：257-293.

熊野　健

1997　「フィリピン、イフガオ族の染色と織物文化」『繊維製品消費科学』38 (12)：698-705.

1999　「フィリピン・イフガオ族と衣装の文化」鈴木清史・山本　誠（編）『装いの人類学』人文書院、103-126.

水本有香

2013　「フィリピン・イフガオ州における伝統農業および土地相続に関する一考察」『NERC Journal』11-(1)：49-61.

野間晴雄

2008　「フィリピン・コルディリェーラ山脈の棚田と遺産ツーリズムの課題－世界文化遺産としての文化的景観と地域社会」『関西大学東西研究所紀要』41：103-136.

Provincial Government of Ifugao & Department of Tourism Cordilliera Administrative Region: PGI&DTCAR.

2015　*Provincial Tourism Development Plan Province of IFUGAO 2015-2020*. Department of Tourism, Philippines.

佐藤　寛

2005　『開発援助の社会学』世界思想社.

佐藤幸男

2003　「観光開発と文化をめぐる政治経済学」橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化－南からの問いかけ』世界思想社、15-53.

世界観光機関

2018　『UNWTO Tourism Highlights 2018 Edition 日本語版』（https://unwto-ap.org/wp-

content/uploads/2019/01/Tourism-HL-2018.pdf, 2020 年 1 月 4 日閲覧）

清水　展

2007　「文化を資源化する意味付与の実践－フィリピン先住民イフガオの村における植林運動と自己表象」山下晋司編『資源化する文化』弘文堂、123-150.

2013　『草の根グローバリゼーション－世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学学術出版会.

菅野正洋

2017　「フィリピンの観光政策と観光研究に関する勉強会 開催報告」『観光文化』233 号：56-59.

UNESCO Bangkok

2008　*IMPACT: The Effects of Tourism on Culture and the Environment in Asia and the Pacific: Sustainable Tourism and the Preservation of the World Heritage Site of the Ifugao Rice Terraces, Philippines*. UNESCO.

四本幸夫

2009a　「フィリピンの世界遺産観光－イフガオ州バナウェの棚田と地元民の暮らしの変化」江口信清編『社会的弱者の自立と観光のグローバライゼーションに関する地域間比較研究』平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金・基盤研究 A（課題番号：18251005）研究成果報告書：61-81.

2009b　「フィリピンのツーリズムと観光地の露天商人」藤巻正巳・江口信清（編）『グローバル化とアジアの観光－他者理解の旅へ』、ナカニシヤ出版、113-131.

2012　「観光が注目される農村の社会的変化－フィリピン・イフガオ州キアンガン町ナガカダン村を事例にして」『立命館大学人文科学研究所紀要』98 号：107-140.